

自分探し症候群の若者たち

戦後五十年の教育の成果である最近の若者の現状は、どうも気になって仕方ありません。豊かな社会の負の副産物として、フリーターの急増が注目されていますが、若者たちの心の内は、いったいどうなっているのでしょうか。

不況のなか、厳しい就職戦線を勝ち抜いて有名大企業に入り、勤め人がうらやむ将来や給料を手に入れた若手ビジネスマンが、突然会社を辞め、資格のための勉強や留学、大学院へ再入学するなどの傾向が強まっていると言われています。いったい彼らが社会生活を捨ててまで目指す先には何があるのでしょうか。資格予備校の大手、東京リーガルマインドでは、これまで大学生をターゲットにしてきましたが、最近では若手ビジネスマンの割合が増えているそうです。

「今の若い人はすぐに会社を辞める。とりあえず就職したけど、この会社は自分にあっていない。そう考える風潮がある。転職しようにも求人がないので資格を取ろうとする。自分の適性を考えずに就職したのが原因なのに。それは、ただの逃げではないだろうか」と関係者は漏らしています。

資格だけではありません。留学も、このような現実逃避に利用されているようです。会社を辞める際、「留学といえば、だれもが納得してくれるし、世間的にも許されるから」だそうです。

さらに、大学院が駆け込み寺として利用されているようです。

国立大の某教授は、「少子化で、大学院はどこも定員割れ。その結果、本来合格しない学生、特に学ぶ必要もないと思われる社会人学生が増えている」と打ち明けています。一方、「修士を出た直後は、博士課程に行きたいとは思っていなかったが、しばらくすると勉強への禁断症状のようなものが出てきて、もう一度行きたくなくなる」と答える学生が増えているようです。

わがままな被害者意識

彼らのメンタリティを、拒食症の人に似ていると指摘する専門家（矢幡心理教育研究所の矢幡洋氏）もいます。

「もっとスリムな自分を追求して妥協点を見いだせないまま摂食障害になった人、自分を磨けば限りなくキャリア・アップしていくという幻想を持った人。どちらも、よりよい自分のイメージを求めて欲望にストップがかからない。体重や偏差値、収入など、目に見える形で成果が出るものには不思議な魔力があり、ときには中毒症状を起こす。しかし、よりよい自分のイメージを追求する生き方は、しよせん自分自身以外の目標を目指すしかない」
専修大学の大庭健教授は次のように指摘します。

「現代は二 代から三 代の大人にも、自分探し現象が広がっている。

人から見れば、よい大学を卒業し、仕事にも適応しているように見えるのに、本人は、本当にやりたいことは違つ　本当の人生は別にある　と悩んでいる。こういう人はいまだに青年期が終了していない。

進学率が上がり、就職戦線が厳しくなると、アイデンティティを確立するよりも、よい会社に入るためのことしかやらなくなる。自分が何者であるか、何をしたいのかというベーシックな疑問を持たずにきてしまう。友人関係も希薄で、本音を言ったり、突つ込んだ意見を言つこともなくなつてきている。すると、セルフイメージができあがらないまま就職してしまう。

ふつう職場で責任が重くなつてくると、いよいよ正念場だと思つて頑張れるものだが、セルフイメージが希薄だと、何か言われると、自分のイメージが狭められてしまうという被害者意識を持つてしまう。

そこでやっと自分が何者なのか、何をしたいのか、というベーシックな疑問にぶちあたる。そこから逃れようとするために、留学や資格などの別の

道に走るわけである」

受験教育をくぐり抜けてきた一人（！）である私としても、耳の痛い指摘です。学生時代を振り返ると、明確な目標を意識しないで目先のハードルをクリアすることのみに専心し、自分の適性は何かという十分な自覚もないまま社会に飛び込んだ感が強いのです。

私が社会に出たのは二年近く前になりますが、その頃は今や幻となりつつある日本型経営神話が生きており、就職より就社が当たり前の時代であり、大学を卒業したのに「ついのすみか」を見つけないのは考えられない時代でした。当時、仕事はいくら厳しくても、会社の内にいるのは快適であるという感覚があり、だからこそ、できるかぎりよい「すみか」を見つけるためにひたすら受験競争を繰り返してきたわけです。

しかし、今やこの状況が一変したのは、ご承知のとおりです。私も今では二児の父親ですが、日本社会全体が大きく変わりつつあるなかで、子どもが

社会の一員になる将来を見据え、子どもに対して、今何をしてやれるのかと
思うと憂鬱な気持ちになります。フリーターたちを全面的に擁護する気はあ
りませんが、彼らには、学生時代を通じて気づきの機会を与えられなかった
犠牲者の側面があるのではないのでしょうか。

気づきの機会

「自分は何をしたらいいのかわからない」

「やりたいことが見つからない」

大学卒業を目の前にした若者から、そうした声が多く聞こえるようになり
ました。自分のやりたいことを探すため、大学卒業後あえてフリーターの道
を選ぶ若者の現状を紹介しましたが、「あなたは何のために大学に入った
の？ 今まで何をしてきたの？」と批判しても、事態は何も変わりません。

ここで大人（親）の責任をあらためて考えてみますと、「自分には、他人にはないこんなよさがある」という小さな気づきに始まり、「これを生かして将来はこんなふうに社会に貢献したい」といった夢につながっていくような環境を、私たちは整備してきましたでしょうか。

子どもたちは、いろいろ挑戦してみても、「自分に向いていること」や「友だちにあつて、自分にはない能力」などを知るのではないのでしょうか。体験を通じた学習の重要性を教育現場も十分に理解していると思いますが、では、実際に何を体験させればいいのかという段になると、戸惑い、右往左往しているのが現状のようです。

子どもが持っている潜在的な力を掘り起こすには、どうすればいいのでしょうか。これから説明する「起業」という行為は、まさにこの要素をすべて内包しているように思えてなりません。

「これで事業を興そう」と、新しい事業の芽を見つける力

それを実行に移すために、必要なものは何かを考える力

協力者を募り、適材適所に人を配置するマネジメント力

まったく何も無いゼロの状態から、形あるものを作りだす創造力

事業を興すのに必要なこれらの能力こそが、自分の意見を持ち、自分で行動する力につながるのです。しかし、机上やコンピュータ上でシミュレーションして「損した」「得した」をゲームで楽しむだけではもの足りません。実際に子どもたちが起業家になって、ビジネスプラン事業計画を作り、実際に資金を集め、商品を作り、それを第三者に売り、利益を得る全過程を実際に体験させたらどうでしょうか。このような体験をすれば、実にリアルに成功と失敗を思い知ることができ、お金は貯めるためのものではなく、どう使うかが難しく、かつ、楽しいものであるということを感じ取ることとなります。